

十代の妊娠

「妊娠しているようだ」と知らされた養護教諭が、長期欠席を続ける女生徒を連れて相談に来たのは4年前の春である。

中学を卒業したばかりの15歳の女の子であった。中学2年の冬から1対1の付き合いが始まり、中学3年の夏に性交渉があったという。すでに妊娠36週になっていた。誰にも相談できないで悩み続け、孤独に耐えていたのだろう。表情は硬く、子どもらしい明るさはどこにも見られなかった。

親と子を含めて再三の話し合いがもたれ、お互いに退学処分などが無いようにと配慮され、生まれた子どもは乳児園でお世話になることも決まり、無事出産を終えた。男の子は、将来も同じ気持ちであれば一緒になりたいと素直に話し、高校生活が続けたが、女の子は自ら美容師の道を選び、高校を中退してしまった。お互いに頑張っているものと信じていたが、女の子は再度妊娠して来院した。それから、暴走族の男の子たちと付き合いを続け、盗難事件を起こし、少年院の世話になっているとの連絡を受けた。

我々が努力したことは一体何だったんだろうと悩みながら、昨年11月までに32例の若年妊娠例に関係している。結婚したのはわずか11例。中学を出てお互いに職を持っており、それぞれの両親が健在な場合である。未婚のカップルでは、両親が離婚していたり複雑な家庭環境を持つもの8例、相手が暴力団であったものが2例あった。

若年者の妊娠の背景には、多くの問題があり、戦後のアメリカでも大きな社会問題となっている。すでに、十代の性教育に対しては、教壇から一方的に与えられるのではなく、個々の悩みに1対1で対応してカウンセリングを行い、自分で考えさせることが大切だというクリニック活動がアメリカで行われている。

かつて私が大学を卒業して間もない頃、山形県の開業医の先生のところへ、集団就職した女の子が妊娠して親元に連れ戻され、中絶手術を受けているのを目のあたりにしたことがある。陣痛が来るたびに泣き叫ぶわが子の手を握り、涙を流していた母親の姿が鮮明に思い出される。今もあの頃と事情は少しも変わっていないのだろうか。当事者だけがひそかに悩み、苦しんで処理されているケースはまだ多いと思う。

しかし、人目を気にしながらもわが子の将来を思い、第三者を交え真剣に話し合う姿を見ると、少しずつだが変わってきているようにも思う。

電話相談などのボランティア活動も活発になってきている。若者の性の問題は根の深い問題をはらんでいると思うが、少しでもこの問題が解決されることを祈ってやまない。